

「男、突っ走る！」

第22回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

五十川	鬼頭	宮田	水澤	渡部	杉島	滝山	杉井	松階	高山	山辺	田崎	濱口	木内	木内	
孝之	美彩	春奈	光太	恭崇	由平	優紀	恵菜	武菜	康行	一磨	良樹	寧々	真保	雅也	
(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(45)	(18)	
中央高校3年6組生徒	中央高校3年6組生徒	中央高校3年5組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	雅也の母	中央高校3年2組生徒	

1 中央高校・全景（朝）

2 同・校門前

雅也やその他生徒会役員たちが、挨拶運動をしている。

雅也たち「おはようございます。おはようございます」

と、自転車に乗った奈々が登校してく。

奈々「（雅也に）ママ、おはよう」

雅也「おはよう」

N「早いもので、生徒会選挙から一ヶ月が経ち、挨拶運動や近隣のゴミ拾いなど、生徒会の活動や活発的に動いていきながら、自分が晴れて生徒会役員になったのだということを実感していました。そして、少しずつ二学期の最初に控える学校祭に向けても、早速動き始めていました。一方の生徒会以外では、相変わらずの日々が続いています」

3 同・3年2組教室

黒板に『自習』と書かれている――教科書やノートを見ながら勉強している
雅也。と、隣の席にいる杉島恭平

(18) が、

恭平「うっちー」

雅也「どうしたスギちゃん」

恭平「情報のノート見せてくんねえ？」

雅也「良いよ(と鞆からノートを出すと)はい」

恭平「サンキュー」

N「クラスメイトの杉島恭平。みんなからはスギちゃんと呼ばれています。去年からクラスが一緒だったので、案外話す機会が少なく、今年になって清水たちと共に一緒に話す仲になり始めました」

と、クラスメイト・渡部崇(18)が、
雅也の席へやってくると、

崇「木内、古典のノート貸してくれない」

雅也「良いよ。（と机の中からノートを出し）

はいどうぞ」

崇「ありがとう」

N「こちらにも、クラスメイトの渡部崇。崇も去年から同じクラスになりました。入学当初から良樹とは親交があったようです」

と、武がやってくる、

武「木内、英語のノート……」

雅也「（サッと出して）はい」

武「早いな」

雅也「どうせ来ると思ったから」

健「さすが、ありがとう」

N「このクラスが始まって二年と一ヶ月。一年生から同じクラスの子が大半、残りの数人が二年生から同じクラスとなり、三年生は事実上二年生と全く同じメンバーで始めました。一年以上、一緒の時間を共にするとお互いの性格やキャラがよく見えてくるものです。特に松井は、毎日のように時間割を聞いてきたり、単元が終わるたびに

英語のノートを見せてほしいと頼んでくるのは、ずっと続いていました。そんな当たり前のような生活が、あと一年もないのかと思うと、ふと寂しくなる気もするのです」

4 同・コンピュータ室

雅也、寧々、由紀恵、優菜が自習をしている――と、ドアが開き、クラスメイトの水澤光太（18）が入ってくる。

雅也「あれ、水澤も自習？」

光太「ああ。どっか空いてるか？」

雅也「今日は部活休みで誰も使っていないから、空いてるパソコンだったらどこでも」

光太「了解」

N「クラスメイトの水澤光太。一年生からクラスが一緒に、普段はお互い違うグループにいるため話す機会は、それほど多くはないのですが、たまに勉強を教え合ったりするクラスメイトの一人です」

雅也「珍しいね、水澤も自習するなんて。い

つもは授業終わったら、すぐ部活に行くっ

て言つて弓道場に行っちゃうのに」

由紀恵「木内は鈍いねえ」

雅也「何が？」

優菜「あれ、ママ知らないの？」

雅也「だから、何が？」

由紀恵「寧々と水澤、付き合ってるんだよ」

雅也「ふーん……え！？」

優菜「やっぱり知らなかったんだ」

寧々「あれ、私ママに言わなかったっけ？」

雅也「聞いてないよ。へえ、そうだったの。」

まあ、同じ弓道部でクラスも一緒なら、自

然と仲良くなって付き合うっていう話にな

っても別におかしくはないのか」

光太「何だ。うちーは、もう知ってると思
つてた」

雅也「みんなくだらない話はするくせに、そ

ういう大事な話は言わないんだもんなあ。

クラスのママである俺が、そういうことを

知らないのは、やっぱりおかしいよね」

優菜「教室にいたときに、気づかなかったの？」

雅也「だって、元々部活が同じっていうのもあつて、クラスでもよく話してるのは見たけど、別に一緒にいても何とも思わないし、付き合ってるとは思わなかったから」

寧々「けどね、クラスのみんなの手前、教室では一緒にいることは避けようかなと思ってるの」

雅也「どうして？」

由紀恵「それはやっぱり、男子の目があるからじゃないの。変な風に見てくる男子もいるからね」

雅也「まあ、それはしょうがないよ。だって、男女比率が悪いこの二組で、付き合ってる者同士がいるんだよ。そりゃ男子たちは、そういう目で見ちやうでしょ」

寧々「でしょ。私はそれが嫌だから、教室内ではなるべく光太と一緒にいるのはやめておこうかなと思って」

雅也「懸命な判断かもね。あ、だから今日こ

ここにいるんだ。教室じゃ一緒に居られないから」

光太「まあ……そういうこと」

雅也「よッ、幸せ者」

光太「よせよ」

雅也「あんまりこういう話聞かないからさ」

優菜「何でママがそんなに喜んでるの」

雅也「分かんないけど、何かテンション上がってきちやった。いやあ、青春って良いね」

由紀恵「誰目線なのよ」

雅也「だってこういう話、嫌いな人いないでしょ。ちよつと詳しく話聞かせて」

光太「絶対ヤダわ」

雅也「何でよー、教えてくれても良いでしょが」

光太「嫌だわ」

と、雅也と光太の戯れを見て笑っている寧々、由紀恵、優菜。

6 同・雅也の部屋

雅也がパソコンで脚本を書いている――と、LINEの通知が来る。一磨からである。

一磨の声「ねえ、誰か国語のワークの答え、写メで送って」

雅也「(つぶやいて) 康行が送ってくれるでしょ」

と、再びLINEの通知が来る。

一磨の声「既読つけたの誰？」

雅也「既読？」

と、LINEの返信をする雅也。

雅也の声「既読って何？」

一磨の声「あ、木内パソコンからだから既読機能ないんだ」

N 「約半年前から、LINEというコミュニケーションツールが広まり始めました。携帯電話は、この頃からガラケーと言われるようになり、この時の携帯電話版のLINE

Eは一番のボタンを押さないと、トーク内容が更新されないようになっていました。またパソコンのLINEは、通常通りリアルタイムでメッセージの送受信ができましたが、この時はまだ既読機能がなく、僕もまだLINEの使い勝手が分からないまま、何となく使っていました。SNSや動画サイト等の需要が増え始めたこともあり、世間ではスマートフォンが普及が著しく高くなり始めていた時期でもありました」

と、雅也が問題集の冊子を携帯電話のカメラで撮影し、携帯電話からLINEを起動させ、写真を送る――一磨から返信が来る。

一磨の声「ありがとう」

と、返信をする雅也。

雅也の声「どういたしまして」

7 中央高校・3年2組教室

雅也が、良樹からスマートフォンを見

せてもらっている――側に康行と一磨。

雅也「(物珍しくスマートフォンを見て)へえ、これがスマホなんだ」

良樹「そんなに珍しい？」

雅也「うん。これで電話もゲームもSNSもできるんだ。すげえな」

一磨「そんなタイムスリップした原始人みたいな反応しなくても良いのに」

雅也「だってボタンがないんだよ。ボタンもないのに携帯電話って言うんだもんね」

康行「携帯電話じゃなくて、スマホね」

一磨「今にガラケー使う人も少なくなるんじゃないのかな」

雅也「そのガラケーっていうのは、何？ 携帯電話のことをそうやって呼ぶ人、最近見るけど」

一磨「ガラパゴス携帯の略だよ」

雅也「何、そのガラパゴス携帯って」

一磨「えっとねえ。(とスマートフォンを見ながら)ガラパゴス諸島みたいに、ITの

技術で独自の進化をしても、国際規格と異なっている状況をガラパゴス化って言うようになつて、携帯電話は日本独自の機能を盛り込んで国際的な規格からかけ離れている。だから、ガラパゴス携帯って言うの」

雅也「要するに、日本独自で進化してる携帯ってことね」

一磨「そういうこと」

雅也「どんどん新しい言葉が出てくるね。スマホってあれでしょ。アプリとかダウンロードしたり、文字打つのも違うんでしょ」

一磨「そうそう。フリックって言う機能なんだよ」

雅也「フリック？」

一磨「画面上で指を動かして文字を打つの。」

（とスマートフォンを見せながら）ほら、真ん中を打つと『あ』、左にスライドすると『い』、上だと『う』、右が『え』、下が『お』ってなるの」

雅也「へえ。普段の携帯電話みたいに、1のボタンを押すごとに、あいうえおってなるわけじゃないんだ」

一磨「そういう設定もできるけど、多分これからはこのフリックでの打ち方が主流になるんじゃないかな」

雅也「いろいろ進化してるんだねえ」

興味津々でスマートフォンを見ている

雅也。

8 同・コンピュータ室

孝之がタブレット端末を触っており、美彩と春奈がその画面を見ている——と、雅也が入ってくる。

雅也「ごめん。生徒会定例会議、今終わったの。(と孝之のタブレットを見て)何それ?」

孝之「タブレットです」

雅也「何、タブレットって? パソコンとは違うの?」

孝之「まあ、正確に言うとは違うかな。キーボードがついてないんで。もちろん、別売りで接続すればキーボードもつけれるけど」

雅也「へえ。大きいスマートフォンみたいなものかな？」

孝之「ああ、それに近いかも」

雅也「いろんなものがあるね。でも俺は、やっぱりパソコンかな。スマートフォンもタブレットも、文字打ちにくいでしょ。やっぱりキーボードで文字打つ方が早いし」

美彩「そりゃ、パンテーンはずっとパソコンだもんね。いきなりタブレットに変えても、絶対無理でしょ」

雅也「だって、キーボードもマウスもないのに、書類なんて作れないでしょ。そういうのって画面タッチだから指かタッチペンでしか操作できないんじゃないの？」

孝之「基本的には、指かタッチペンですね」
雅也「そうでしょ。デジタルで絵を描く人には、そういうのはもってこいかもしれない

けど、文章書く俺には縁のない機械だよ」

孝之「ちよつと操作してみます？」

雅也「良いの？（とタブレットをもらうと）」

あ、結構重たいね」

孝之「これから技術が進歩したら、もっと軽くなるんじゃないですかね」

雅也「そういう時代が来ると良いね」

と、慣れない手つきでボタンを押して
いく。

雅也「画面が綺麗で見やすいね。（と焦って）」

あれ、これどうやって元の画面に戻るの」

春奈「機械音痴なおじいちゃんか」

雅也「そういうこと言わないですよ。まだ慣れてないんだから」

孝之「（タブレットのボタンを押して）ここを二回押してください」

雅也「お、すげえ。何か変な違う画面に変わった」

10 同・居間

雅也がテレビを見ている——真保がスマートフォンを見ている。

雅也「あれ、母さん携帯電話変えたの？」

真保「そうなの。スマートフォンに変えてみた」

雅也「使えてる？」

真保「画面タッチは良いんだけど、文字打つのがまだ慣れてないの」

雅也「やっぱり、スマホの文字の打ち方は、まだ慣れないよね」

真保「でも使えるようになると便利よ。お店のアプリとか、画面見せてボタンを押すだけでクーポン券になったりするんだって。携帯電話も便利になったわ。そもそも、携帯電話って言葉のとおり、携帯する電話が元々だったのにねえ。それが今じゃ、このスマートフォンで電話もできて、メールもゲームもできて、買い物もできるんだから」

雅也「うちのクラスでも、結構スマホに変えてる子が増えてきてるの。やっぱり携帯電話と違うのかな。確かに調べものとかするのにも便利だよな」

真保「あんたの携帯は、未成年用でいろいろロックかかっているからね。まあ今年で十八になるから、みんなそういうロックとかを解除するよりも、スマホに買い替えた方が早いと思っただんじやないかしらね」

雅也「まあ俺は、パソコンがあるから何とでもなるって思ってたけど、出かけたときに何かを調べたり、どこかに行くときのマップがすぐ見られるようになったらやっぱり便利だろうな」

真保「出かけることも、マップ使って場所調べるようなこともしょっちゅうないでしょ」

雅也「そうだね。あらかじめ調べといて、それをパソコンからプリンターに繋げて印刷すれば良いんだもんね」

真保「それが負担になってなければ良いけど」

雅也「俺は、それが当たり前だと思って生活してきたからね。だから別にスマホに今すぐ変えなくても良いかなとは思ってる」

真保「そうか。まあ、あんたがそう思うなら良いけど」

雅也「うん」

真保「そういえば、今年の夏は九州に行くことにしたわ。今年の秋で、父さんも任期が終わってこっちに帰ってくるから、今年が最後の福岡になるわね」

雅也「そっか。今年で九州も最後か」

真保「寂しい？」

雅也「まあ、こういう時じゃないと福岡に行くこともないからね。また今年も、何日か福岡に行ったら、そのまま広島のじいちゃんのところに行くっていうルート？」

真保「一応その予定。ただ、今日父さんが電話で言ってたんだけど、どうせ最後の福岡になるぐらいだったら、福岡以外にも行かないかって」

雅也「福岡以外って？」

真保「馬刺し食べたいんだって」

雅也「馬刺し？」

真保「熊本に有名なお店があるんだって。そこに行ってみたいんだってさ」

雅也「最後の九州だもんね。いろんなところ回るのも良いんじゃない。家族四人揃って九州に行くことなんて、これが最後になるかもしれないし」

真保「どうして最後なのよ」

雅也「だって、これから俺や健が大人になったら、そもそも家族四人揃って旅行に行くことだってなくなるでしょ。こういうのって、今のうち楽しんでおかないといけなんじゃないかな」

真保「そんな寂しいこと言わないの」

雅也「けど、現実的にそういうことはあり得るんじゃないかな。多分大人になると、いろいろ予定も入っちゃうだろうし」

真保「あんたにもいずれ、そういう日が来ち

やうのかしらね。時の流れって残酷ね。家族四人揃って旅行に行くことが当たり前前だ
と思っただのに」

雅也「しようがないよ。いつまでも、家族四人がずっと予定合わせて何かをやるなんて、無理な話なんだから。広島のじいちゃんのところへ行くことだって、いずれば父さんと母さんの夫婦二人で行くことになったり、あるいは俺や健が一人旅で広島に行くことだってあるかもしれないでしょ」

真保「そんな日が来ちゃうのかしらね。けど、夫婦二人で広島に行っても、おじいちゃんたちがつまらないって思うでしょ。やっぱり息子夫婦よりも孫の顔が見たいんだから」
雅也「そういうもんかな」

真保「そういうもんよ。まあ、おじいちゃんたちが元気でいるうちは、私たち家族四人が揃って遊びに行くことが何よりのお土産になるの。それでおじいちゃんたちだって安心するんだから」

雅也「なるほどねえ……」

真保「ほら、明日も学校でしょ。早くお風呂入って寝なさい」

雅也「うん。風呂入ってくる（と出ていく）」

11 道（朝）

雅也が自転車を漕いでいる。

N「新しいものを取り入れられ、古いものがなくなっていく。ここ最近の学校生活で、僕はその変化を痛感していました。そして家族の時間も同じように、これから変化していくのではないかと、この時の僕は思っていたのです」

つづく